十二源氏袖鏡　九

特別
へ12
5091
9

源氏袖鏡第九

わかな上

同　下

ヘ12
5091
9

<2001-075>

源氏

卅 若菜上

朱雀院の御門なやませ給ふ事をおもく思し

御しまれなされ也乃御かいそ御くしおろさせ

つき御ゆうりたまひ御寺ハ西山にうつらせ

給つゝ御子たちハ若き親きたてまつりて

女子四所（よところ）おハします其乃中に先帝（せんてい）乃

源氏のにようごをきさきとなし給し女三の宮

をあまたの中に又なくかしつきたまふに院ハ

まことしなけれ親なとし十三四なれハ

おもする中にもいとゞけうをふみし給へし
きよらんれうしをこのみきんあんにあ
つけまほしく名をも世にもちかはやと思
よつをそおもりしたまへくれうしるとのそら給
人とあまたありける大納言と申ゆかりハさし給
朱雀院の別当にて御しませハ御心をその
ほかのゆかりんけ文をあつかひさかやと乃
そと給文ありけるに給ひハあまりつくをきこしめ
て給ひて人よろしくおほせをいはみしく心よしみ
てかなふ文ちらしの大臣此ゆちやくし給中納

ときこえしハ此時乃えにたく此門のかむすめ
あまたハいえさてまつりしと思をさりくかひされハ
此おほくの物かたり月夜の内侍乃かミを中さちよ
て心をはくしてやたまふされともいかてまりく給
もあさけましハおほしよらぬ人かハ宮さちの此
給へりふさしあまへきんなとのあるましく中宮
人なりされとも六條院またてまつりなふ
へき此思しにくうらくなゆ宮しきこゆなふ
此ゆきさきせまり給ふも世にうらやむまちなく
きこえとつかし給ひ素文あをかりあまりいら

めしきこえさせ給て秋好中宮よりも
此さうそくとしてたてまつりけるものなりこれハ
斎宮にて女御にまいり給し時朱雀院より
まいらせられしさうそく也その心をハうつしかへて
あらためたてまつりたまふさうそくのなこり乃心さよ

秋好中宮

さしくしのはこをかたにつけたまふたまのを
うれえ給ひなから院ハゆゐんしつけて也
此つきふ〔?〕ろ御きよろ御代をとつき乃
をしも給をたまいてとひきこし給てあへ

御あしらひハおもしろくゆつりきこえさせ給ひしにお
もてしきうんさし也 あん御とハお やかり御なり おくゆかしき也
てらありてそ院ハ此らしおかし給ふ山のす
まその外にむしとのおきやうの三人おりふしなきを
まつりてゐ女御かたハ文をかきつゝゆかりみちて
なきさうて御とゝ心あるへしそれにさかへひま
六条院まゐらかくつゐくに女三の宮を源氏
よおやさ後にゆつり中給ふ御こゝまゐりけ事給
みやとなつくる事ハ六条院宮の御たよむる
られんの君わか家にまかり給ひての名也みなとの

扨〳〵のちすちそにおもしろき屏風之へし

うちわたしめておもしろくしつらえれたり夏

冬乃内將監米のたこみつかさまてひのはし

のさいはいちんちんをつくり内ゆかたつきうけ

此たこ金銀をていろくまえをりめられねさ海

小志きし絵つり人こまかなしてたまし小

おもふとて六条流ハあるつまは内面いかんを

ちん乃おしき思ひてわすれさ海たちわまの銀

そこらの筆なり　かんの君

わかえさす按察の小松ととさつれてすと

のけふをいのるまふ事ひきもろもろの御子たちもり

帝かうけんえんをぬるりしつ絵つかはれけり

をとりれうらく源氏

小董原もなおのよういふ記されてや按察へ

のまうのもとぶりをつむへき　けふのゆ人のうたなりり

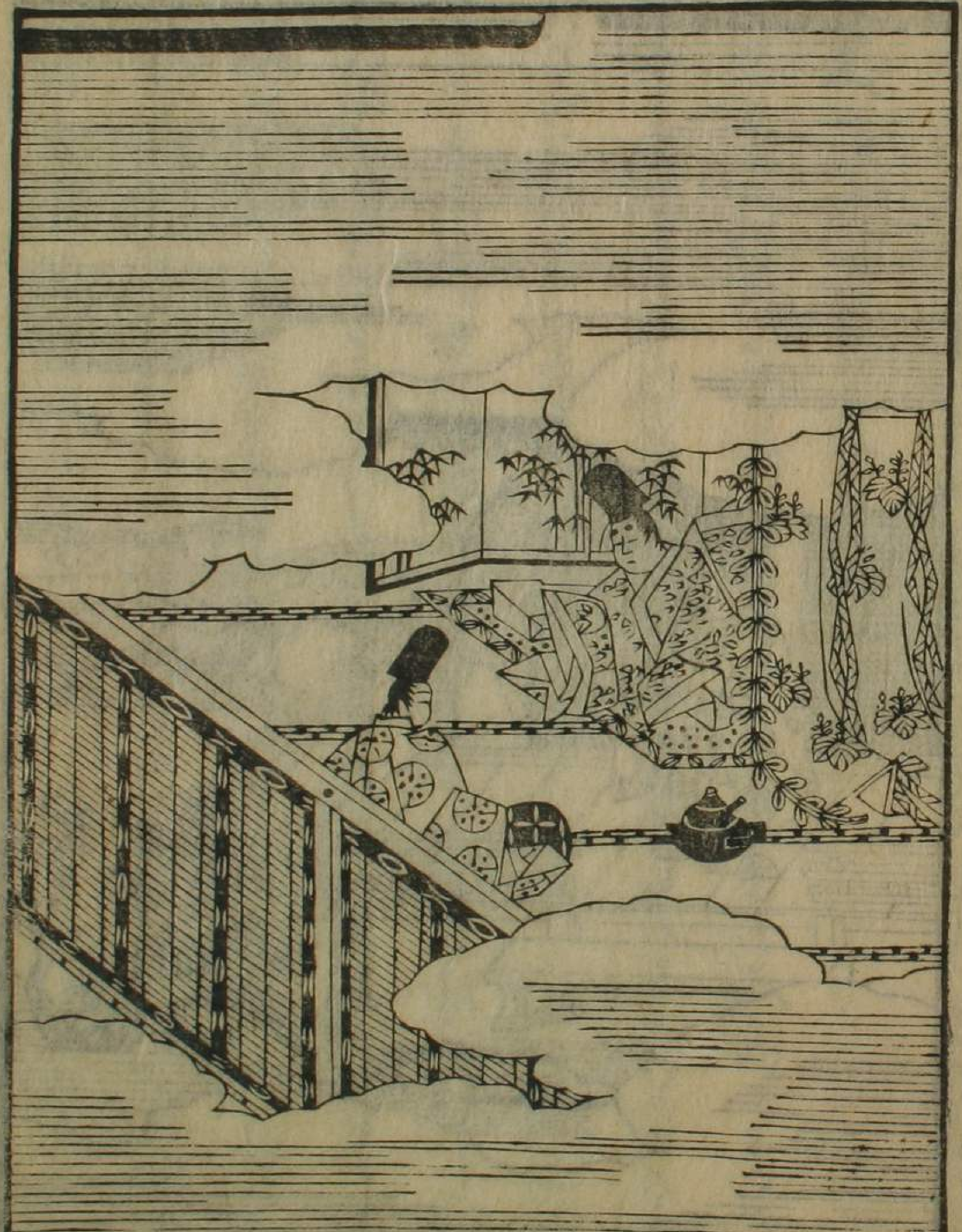
おくつきうたかん乃君ハ御りあまふうして女

三の宮六条院にわたり給ふ二月十日の程

なかまの上よりはつきく按ひしうちれた

もそへよみかそてらるやうまれて中つく冬ま

いつし絵かきと紫上



めぐりくるつきハちゞ世の中を照ら
まどくたのこけのか　源氏
いのちとうたかもなくしめけるあるまき世
のつねなりね中の契りをこゝのかハ此二の文
へ乗られすくおりしまゐす雷かりさる有る梅
の花につけく此文あか源氏
中宮を忍ひつゝかとはなけれども心もろ
深くもさのあそ雷清在此二の文
ちゝれくてうたの究うそそきしあ言さ風
小さよふ芸のあり雷ゝくて後元朱雀院ハ

はし山乃御寺へまいらせ給ひけるむかしのあはれは
たゞ法文あり朱雀院
なむかしは世よのこゝろ心そへ入山ちゝ乃
なしたゝかれはつらひは女房してさゝるきさし
おさせ給て崇上
かくて世なりしろめてはさまつえ紀ほりし給
あのくけなさるれそ御寺よりつらひ給て後
は山のみしくかゝり女御とやさ取主は御すゝ
ゆくふちり給れとあはれなりおほろ月夜の内
侍のさいは文相くの二条院はさみりまつらひ

給り大きさの文もくれ給ひしにやありき
かれありし御なかりし屋よりさんとおもひしるをうらく
小君のいて源氏の御消息して給へて文之
左衛門のかみは中納言の君にせうそこ
なかりしを此前のうち源氏めしよせて抱こし
にくきこともすへきことありしとおもふに給へハ御物
のこゝハおくさわしう見えにけり○とくくはかへ
りよりすき山の此門乃かわり御をきそれ
ていかにむかしおもひとりこそらん京ふ人へ
ねもそものとりんしそおもかうくへけりしと

まてうれ給門前 なきあとと人まいひくま
め一心乃とひいくらえんされもかのさのさかり
とみちのさるへきて源氏はうり給へまいらくハきん
こゆひされて程もおなけきハ抱こしまて源氏
さし月をゆまへにてあかき名さもせき
をくおもつあらくらり　女
源のとせきとめかたに思ひつて行あふまちハ
きやくたしきさとおもやうふの給ひあせといひ
さうし空蝉のさかさもえゆきゆへそとかへりてあいひ
みまつはいかなしへあかもかへしく給ひてあけぬ

もろこし山さつきまつ日のおもしろく
ふやまひすてそわすふちく二条の太政大臣
の時藤の花のえんせられしその藤は花さ
かりれは立かへりひくは藤よいかそめなる
文よりかはえすうねむかふまりひるまとて人め
してさるわさろ花一えゐきせたり源氏
弓引きしもつまれぬ物をこかまし海すまもな
きけへきやとのあちかき女君もつましくさい
まれまる花のうをいかりしておほろ月夜
のきみかちも海しのふちすてうまし

やさるにおのまきの院せさせまつらぬさやと
まやこ海ゆふかうらひておもひまふ弱くそれかみ乃
けれ有る海と業上御つけてさふしうと見ん頭と
おかめしてめくすしおそくすもつめしへのやう
まへ桐壺こきもしねぬと源氏をさくはゝ見ん
ちらすら頭ん中てつくひかりてもちまんまてと
清心をこか頭よろ川桐壺しくそ内ちりの上
二 男よちく御やきわらんこらまりふおもとゐの
山もうつろひよたり源氏
水る乃らのかたもかりつねと舞の志る

しそきしきとなれうらにかくてやまとうぬゆゑ
のちいとくらうしきたり明石の女御は中宮に
めでたくてそうしりゆかうしあきりてまゐりそのへ
里かの尼君とはちやらん年ぞかくなけれそこよ
まゐりもとのかの女御のゆかりはいまほうかゝる
はあま君はしめてうしと源のこゝろ見まゐらす
つきてあかしの浦までむかれ給ひしと入道の
今はの別れ給ひし時なきをわすれたまうし
世はなまうらてきて給 明石上にはりうまうしやる
しをなきき小見え給しくちぐちきを給ともあ

くはうらのあま君
老の後はあかしにちかくすみかくれてすま
とされつとりめし女給
ちかうしあま代源語のちかくよてゆゑも
みかやと海のうまやをとてうき給 明石上
世をたのみあかしの浦まで見人もかのやとは
ちかけします し 三月十日あまかはりやとう
こ給つり源氏も出けしめしやうまう神しとおか
きう出めの上ちかましやうらくしてあかしに
まし給 源氏もそうつはに給をいふありき給

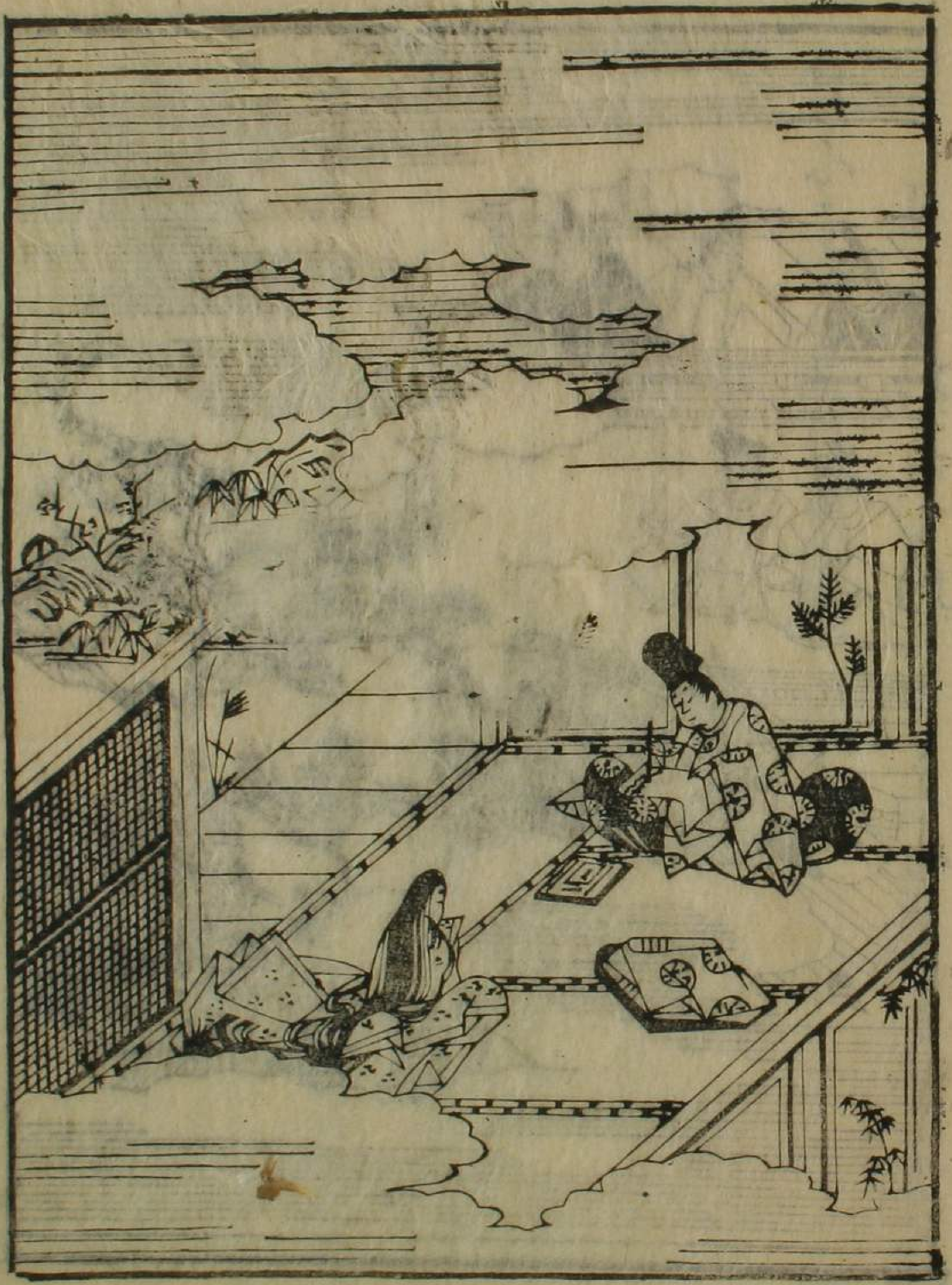
うねやしきひともうちつくにはつきひつきすくなし
明石の入道けしきをみてとにかく世にかゝりては
入道乃父ハ大臣也位をもすてゝつかさくらゐとり
ゆるし事は物しくて世にたゆまたなきさいはひ
おはせまてと住吉の神をたのみてまうてしに
毎ともくつく月きしてへ歌人のあはせて明石の
女ほこきたちて立給て後へにしほ人これら
つきてハ明石の上をともをむすてのさきし貢
も夜入道ゆめはこしやうに治との山とも
のまよさけるか山乃こなたにより月日おく世界と

ちるそまつるハ山のあなたにけいくれてそのひかり
よおもてす山をハひかき海ようみとほく入る
いちいさきあたにのりてみの方をさしてこきゆく
とみまりハそれか乃事の方にあらんとおほし
まそのゆめか明石にとをかれたるかしゆへ給ハ
けふまたのをとけくるか歌をよみてとき也
とくうしくいはひくへ道
ひかなむあかまちく縁なりとそみ
夜の夢なりもろとて月日をさなりけ文のさきて
こかといひつまのりはのたくの歌よまれまた

うちに〇あつまに入りけるそのあつかひにやさし
たかあくは音にませたりしとは弟子よ人々に
をしへさせ琴琵琶まで弾きけるせきりして
かくし一人まうけは二人つまく我いのちをりん就
もろこしめしかけ身をいふ波きわまりし給
らんあまりうれしさてよろこすまらめんいかに
と文まいらされはあま君はたく〱ゆくらのえ給
たつ〇まうけるこゝろちしてなつかしき給ひけれ文
若とは源氏うけとり給ひてつゐにむかへて斯
よもきのまやまひりかはに条院に鞠あ
そひあり女三の宮の御すまひとてしんでん乃在也
御かれ乃ゆきあひそれてよしあつかりのおと
をしめてみれは立あかり此は夕霧をは大将かな
中々源氏によも御心みつかりまらって世乃人
まあ人の大将とて中なかまりの庭に清の緒は
大将みとうとし宮まつ花の宮なれやうちかつて
まはゝ猫はかきてあしのほそひくたれと清め琴
とはみえしの中れ柳のかけにわれはかりあかし女
三の宮れたりしすみをのちにかりし猫この
ちいさくかつをまて見ゆらしたさまされこのお

ひつきくえし里ならいまつらんねしやつなと
なりくつまそて少んとひこしらふかりふこそのつ
まはりて門あけるまでまちみよそしつるひさし此
二のまれひんしよそらまてか女房さ人と見て
をさらのかりうみうふれらしハ柳のいとのやうて
うちられるくひきまてくうちうさふあまりてる銘
一尺えうつけふあまりさんとこゆうまれ乃
月けハたくくさゆらしてさうすの銘こう
まいのけそたるくしつまののかさうりそうやうり
見てきり銘このいてくるけハ見んえりのまへて打く

ちおりつふわくうつしの人やと婦とみしより太
ねハかさりいてくてうち志つふつさ銘時立くれ
かくりさりつ法まよ四銭志からの傳つ銘也
も志けうまれかのうまれともそれとりんさてまつ
思しと銘わしまてく出まを後銘しくのおか
へみなよひきこし銘つりわましとあすつてらいまち
ねまし物うしやうの袖さらへきうし袖けりて
流りけまいつ傳つ銘ハ花よよせても分りあ
のこせられてくり銘乃をらしも大好と同車
まて海氏の女上乃流くさりつふおらしまさね



事をつけく遣つ乃こと
いつれハ花よこゝろふかくいその橘とほさ
て拾ひよハせぬ大将
み山木よ拾ひさゝむとこゝろもいとそう
花の文ふあくさやよいのつこもりよハ花越
こゝろよ小弓をゐせてまかりかへりすとかさし
てゆきれまかりていつく抽ゆりそ書きハ
小将殿のうへさいの文庭りまふ柴の髪
よろしみくおもぬるけきハこけまとまる越
点しき花の夕をふ小将殿

ときにあまれいそきさうらをそれぬえ
たふとかりけきとゝ

同 若菜下

衛門督ハ中納言になりて女三乃宮のあね女二の
宮を北の方にむかへ給へりこれハ下らうの更衣
ばらにおはしく母更衣もおもひおとりやうのことに
もてなさ給ひ女三の御事をのミ思ひくらし猫
をと春宮にこひうけて世にしたて春宮より文
東の猫を志りしあつかひもなくもてなすところに
猫をなつけて衛門のかミ
およそ人乃うことゝなりて世ハなきまよ
給ひてなく猫なうん源氏の大殿ハことし文

住吉へまうて給ふ紫の上あかし
のあま君明石の上れいの御車十三かん
ならめ殿上人数もしられぬ御供申まゐり源氏
ハ神もたまあらしふ志つ給ひつゝもまつ
さかのやうに思しおもはれて源氏
たれか又心をしりて住吉の神代をへ
松にこととふあはれに御車へしのひてたてま
つり給へ明石のあま君
住の江をいけるかひあるなきさとハとしふ
るあまもけふや志るらん　明石の上

むかしこそまいりたまへれ住吉の神の
御とくにつけても君乃みてたさたまへる
しるしにかくまうでゝものゝしたまひて栄え
おもひやりもなきさまにしたまひて万歳く
とつきひきそゆく代のはじめをいはひ
きやうなきな上人さらはれる萩をたちやよ
さしてそ一こゝろまひ入めてもおかしき
松原の深みどりなる中にたてゝまいる車
もの袖くちにてまとれの風になびきたる袖
いとな海めくしけらもなかつきて袖まいりて

たすとそこも人々いかにつけてさいはひ乃明石の
あま君のさいはひを世の人いひておどろきけるかな乃
ちしの御すき乃と姫君おはしますの君とかはるく
たうけ時もあるしのあま君くとそさいはひける
その姫もあるのは紫上
まとの御れ景をみくをさし君ハ神の御け
よりもゆかしくそも女院
神人の中よりもわかれて髄にゆかしける
御き衆の君 中務(なかつかさ)の君
そのかはりゆかうちそはひとく君はさまにいら

さるを御門乃勅ありて女三の宮はとしはわかさん
のうへをおぼしめし給ひしはいかんとならばさうり
給ふと院の仰らるゝを源氏うけたまはりてけ
れハ紫の上もれいはまほしく給てよるべきし
へ中納言朱雀院ハ女三よりわか給ふうけられなばな
まゐるを給へんかうりハそう人もいみじきとにぞ
なせまうし女三の宮乃御事をハ源氏の院よ
りまうし人まひ人のきこゆ世かのおほけなき冷
泉院の御くらゐを今上にゆづり申給へりおほ
かの御門を院と申侍りきまうしけれハ六条院の

女御乃うちに給へる女宮の給ねぬさうさすとも
ひなうらきしおほりてハめでたくかゝりける御嘉
殿ハ今上の御代まて御おほえよく時の人なり中
納言またなかりてあれハきこえまいらせてもおほ
事なるにねうさうのみありて朱雀院もとらへし
とかくおぼしめさるゝや女三の宮おや女二の宮を
ゆるし給へり一条の宮に住まひ給へる御息所
かしはぎの女二の宮ハ更衣ハ更衣まて
は一条の宮と所と申し女三をいはまのみかと
りまさへきこえまし此二所給へるの女楽

とゆるけ此二条の宮はさん川給ひし也となん給
物の怪によるゐの物におそはせてわつらひ給ふね
うぬくし紫の上もゆかしかりけり給ひさらに
久しくなりて里におはしますほとはさん殿へ
紫上おはしてわつらくのゐ物ともしてあ
ゆせく二条乃宮はさんにおはせんと思ひ給
女院の君しやうのことに二条はやさしむ紫の上わ
うん明石の上をもめんくれ几丁たちへを置
さてにく中の君よい源氏のおましよりさいて
きやうしまふ大将の三君とひきとられむら

雅の院たちは太郎君と二人よき絵あかせまふ
此時もちあん人の文ぬしやうのこと此ぞくしあてたり
とつめんとてみそのときてよひきさてたまへり
あまたし川ひて君くひとつ川てまつりをあふその
つゐてはみそのうちをのそきてはらくを撫よ
わか人ゝ多つ文乃はらさをのそき給へ大人よち
ちいさくあくみたくたくはらのこのあるゝちし給
にちゐやうちかはをとれてたとやうふはうしは
ゐさらわきよわちられてみて柳のいとめとし
あぬめしうつりきはうち也をきさ紙乃

中の十日あまりの比あてやさ乃まつふさかりし
めさん心ちしてうらひそれを風もみされぬ
色くあへりふかんてまみ女性の君ハおもしろ夜め
きまそる乃ともとしおひあいきやうつまく
こゆよくされこかれる薇の花れ夜よかり
てろうにすゑ梅花たきわかるそうもろう
紫の上ハむまこへハ藤といひくもよ紅梅より
よふ匂ひおかくちるやうよ見てまふ雲のあを
おかよ霞のまよりかもさくらの花さゝれる
とこゝ心ちせ明石のまへあくまてよしありを

たゝき出ましてゆくすゑをおもひ心みてこゆさは
やうふつゝひろしうちえちれまてすゑ氏さくら
も梅さかりさき月まけりけむちら花乃むもとも
くしてとし母のさしんなりそしまつる過と
きくめてたかゝり花ハむ月のまゝ忘たりける賀
ハまさしけと次さめ給つるとしつよ此女楽のあ
くるきにも紫上むまとやさまいてかゝそめと
おりまれもさしにとこり給つとしてようり
ゆきまへハ源氏の女御まよふ事りきかたく
て御賀のすの心ぬれいのかすまも心まいりよ

さても源氏むかしのことを思ひ出て二条院へ
わたり給ひけるに女君のかたにて六条院ハ
大かた君をけちかきやうたかきやうのひまを思
ひよりて御つ給小侍従をむかへさせてあさきこと
まうひとかうしるく二条の文これあつかりちかく
たちゐへ物こしにてもおしはかるにいはれたる心
さしのほりともどしまいらせたてまつらんとあまりよ
せめ給へハせめかれおうしてさしいさるへからん
ひまにと思ひたり卯月またすかぬかも殿のまつり
あまとて二条の文これるよりも前院へまいり

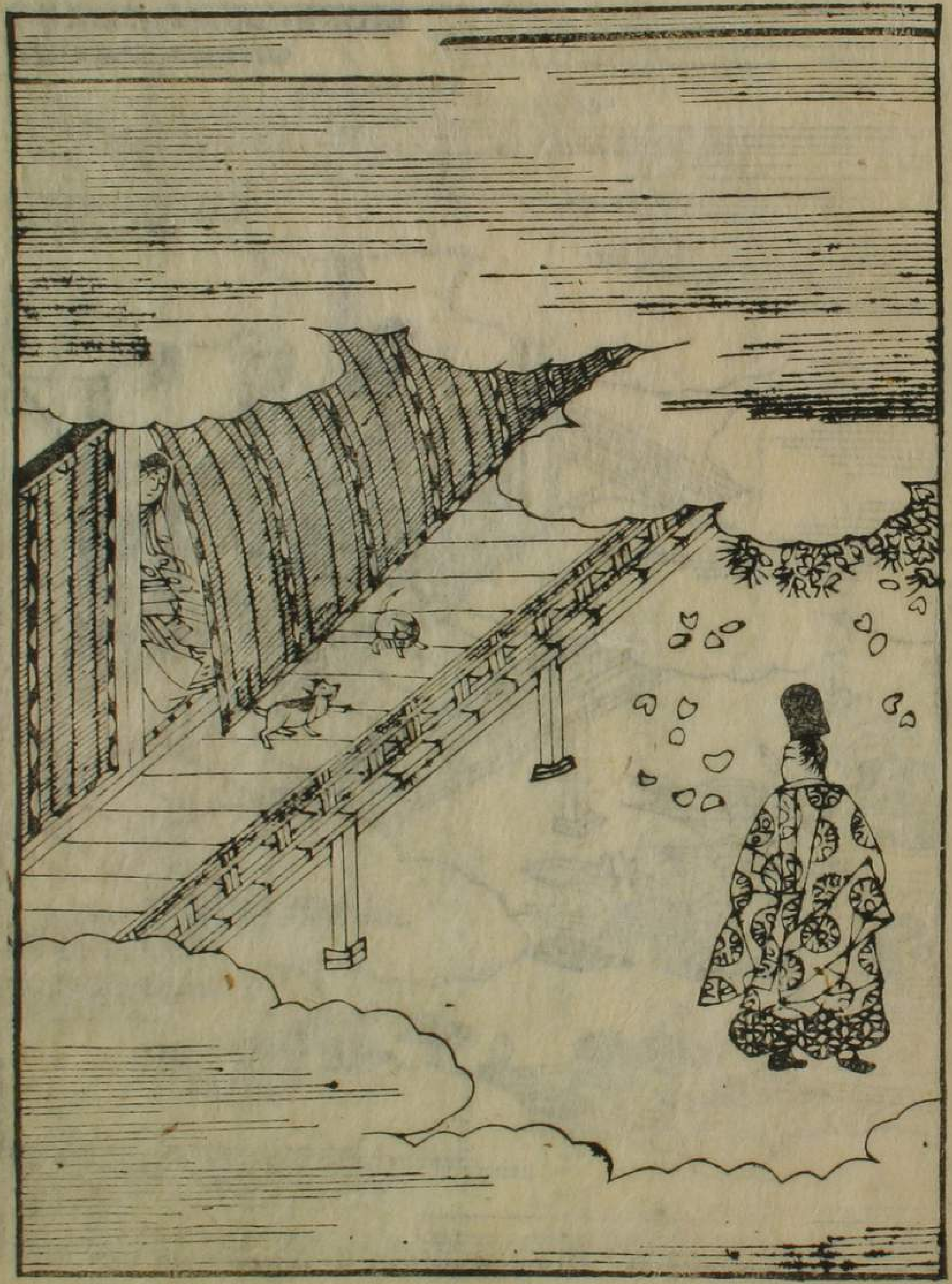
給女房たちもおほくそのほかハ人も物見に出へ
あまり小侍従一人宮乃内におはりちかくさふらふ
ぬよきひまと思ひて御つ給へ人おほせさせり
よろこひなからいそきまいりつきておはしまし文
ハ何んもちく物ほとみのことわすれるをおとこのたたひ
ちかうきこゆるを院乃おはしますとおもへるに
おうちかくこまやかにきこえてゆるされも
よいておそろしくなりまきてもありおし給を
そきこゆるやめつくたにあさましとおもひそまあせ
も水のやうにながれて給ひまへ見え海ろくし

けるを見てまうでたりけるをかへりむまのはな
き侍りし昔の御事にありし事を二条の后のよみ
てたてまつりしとみえ侍りやそれをもてこのあてくらき
御ことさしかはされたるが行きかよひもはべ
たりけるをゆかしくわかれてしてしてくち
おしみくれの春よりも人にしたがひ侍る時
ねまきて御心もきこえぬおもひにはべりての
御かほの袖かはらんとするはおきてみてなれ
也あり二条后の御
何とくれのそこにうき男はきこしめさん御ことなり

なりとてもやまとくあの御目にまいりなまし
とも物見るもおもてまでいみじきあやまち
しけるやうてなるあまり侍る時
くやしきことをしりなつかしき秋
のゆかしき御かたらひ女二のきさきたちの
ほかつきはなれて物とのこと思ひもいれ
ぬとすき侍しく物しかみやうのこと申す
なしておもひるもしやいはれもおもしく
ハ女ことにもよはりまちまちかはりとさて侍る
日ころおもかはるいかむなんなるに

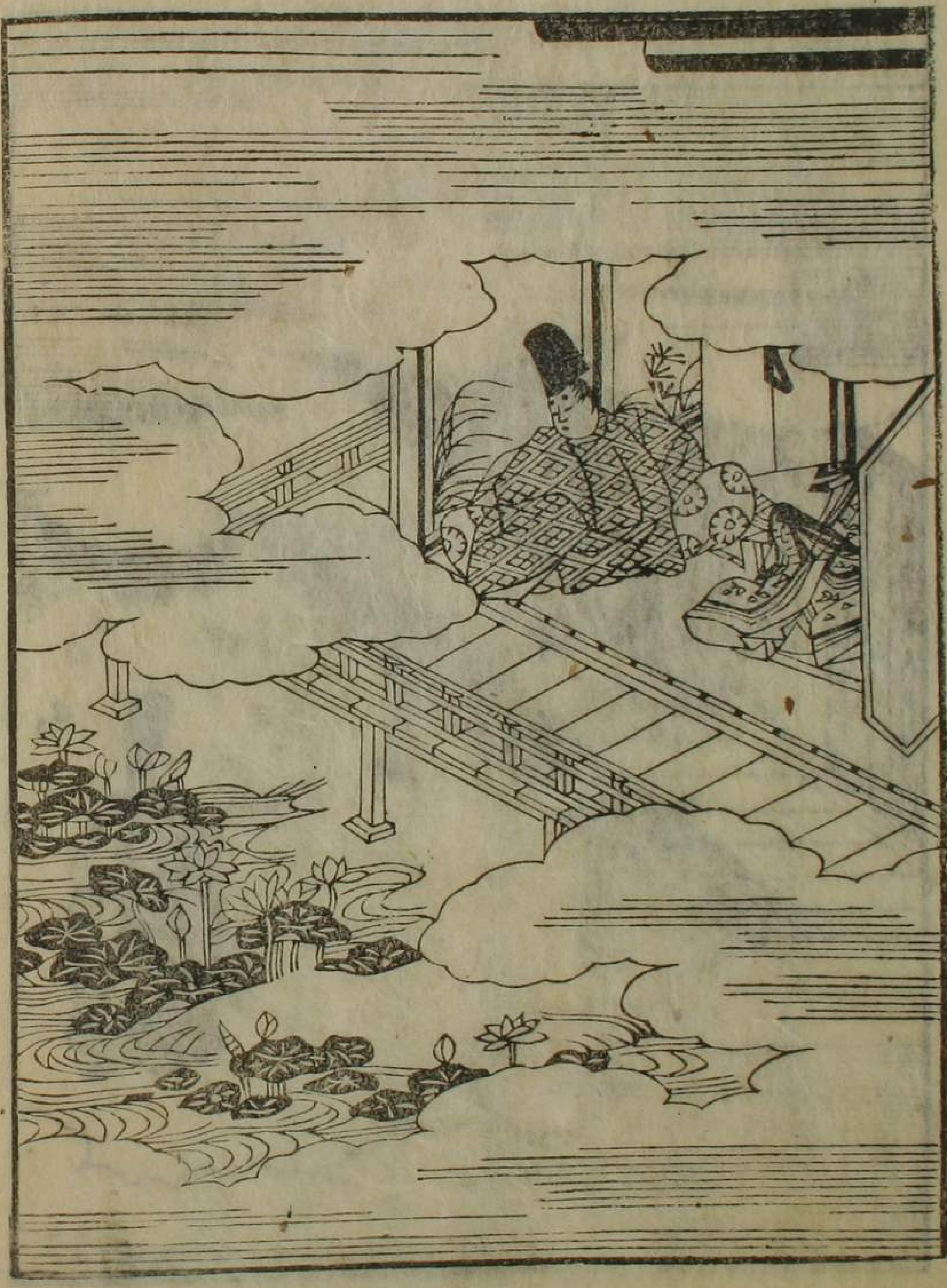
むつましきかたにおほえしもとひとたちかへりかと
のまへり此日紫の上たいの給ひてなくさめのへん
しやともめしよくろまいりをみていのりをち
あたり 六条のみやす所のことなり
我身にうらみぬき海なれそまいらしたまひ
まゐる君ハまたゝ源氏のみなれまことうしまか
ほとあへるひまつるをとくまいりそのちゐ
きこしをとかりて出家をのそみ給ても源氏
行しみ給て流いてきこえわそよそてよかりとを
さゐせなまり給六月よたゝかそそもこくさいやうて

ちらきそ此花のすしをたちとさめてうし給
へハ源氏う給しきたの給もあれなそ紫の上
ましとまらかくやハぬくさたまさつにいちそ
の露此かりてわをかく源を此あへなとく源氏
ちきさりをむけ世にもてもちろを紫の上
のち露の心まて川ふ二条ののかいありしを此ハ
ぬりてたくまかけれなるにたすやと給いるらやそ
とて源氏なりまいりみしそてまつるもそうれ
そろしくきこえ給よ又紫の上此事へ源氏いか
給ゆくされ日くらしのあけハ二条の家



夕顔は袖ぬれそふや白露のおくとき
くらおきてゆくらんまたけふもうらそあれ
それの頃は六条院よりまかり給ひし源氏
また里もいりてきこえんとくに心さしす
ひくしの頃とくおき給くきのふみをよし
給ひしおもしのあたりにたちてまゐらせよの
さとみを出しておれに風めらしてありけれ
とそれあさまきを見めぐらし給時のまへのきさ
まかみきりのうきやうたる文を源氏見つけ給
つり　しとをつくひきよくと御覧なさる
是は清少将のことのは文也

なきやうなりしあるも御ゆるされやかならん事也
文をあさましくおもひ絶て我しらぬ人も
見つきさまをしりてもてかくしてそれより後
ハ二条乃文ハもとのまゝにはしけんかしハなかりけり
宮もいとあつらしくこゝろうくおもひたまひて文通の跡も
かの御ことゝもきこえ給はてうあるもちしてなし
くるしくいとくるしきもやましくきこえ
もちやまひにならね源氏ハ人にかくとの給ひ
きさまなりねハ此ごろひたすら小御物思ひしけれてハ
御しへようかならぬ所君のひまさきもち給ひ



とゞ然も今そうき子あり里なりと思ひしられ給
ひける物語月秋の内侍をいまも思ひ給ひ
うけしその後いちよう逢給ひをあまたなりけれ
ていと侍されまて源氏なりおきみれのちやうらく
れけきちすてゆてうとまてまつり世なり源氏
あまの世をよろまきらあや源氏のうしろに
まほされしもまれなくよ内侍内侍のこと
候ほとかたいくいさひとくれなんぬ君のうら
にいさみ世し君は内侍年ころの後よりけ
給ひ也二条の霜月の時さなるまてに内房も

ふてしきれて山乃法門の御賀ことの外のひて十
二月廿八日よありなる彼宗との心こ此日源氏
法門積の志てらい中給をあさりにめしてさけ
をめ世あり志ね給ひてなようぬれ申し里
にくたりまきのやうなれと物う縁しきなこと
たともをのまれしと法門積ふのおふくめて
ろしくふひてみそうち申しるりしまて又
もなとしもたわふなり廿五日の法賀なるは五
十の御賀なれは五十寺に誦経し給ふの
おほきまてゆるらもまふひろされの